言語生活

――第一部　終戦後・昭和三十年まで――

金田一春彦

一

敗戦を境にして、多くのものに変化が起こった。国語学の分野に限っても、幾つかの変化を教えることができるが、中で著しいものの一つに、学者の視野が「言語生活」の方面にも広げられたこと、それに関連して、「言語技術」の研究が急速に進められるようになったこと、がある。

国語学の研究分野を、いわゆるラングの領域に限り、抽象的な言語記号の形式やら関係やらをあつかうだけだとするならば、学問の世界が狭すぎた。これでは、国語学は、一般の人の日常生活とほとんど交渉がない。言語行動が一般の人にとって、きわめて茶飯事的な事実であることを考えると、これはおかしなことだった。それを、広くランガージュの領域を眺め、コミュニケーションと社会生活一般との関係を考え出して来ると、研究課題は、むしろありすぎて追いつけないくらいある。

従来は、研究対象をラングに限るのが、いわゆる言語学プロパーの行き方とされ、一方対象をランガージュ全体に拡大すると、それはメタリンギスティックスなどの名で呼ばれる、すじちがいの学問とされていた。戦後の国語学の大きな特色を一口で言えば、「古い言語学プロパーからの脱皮」ということになる。

もっとも、ランガージュに属するもののうち、いわゆる国語問題・国字問題は、戦前から、それも数十年来、活発に論じられ、モメつづけて来た。しかし、仮名づかいの改訂や当用漢字の制定によって、一段と関心の深さと論議のはげしさを加えたのは、戦後のことではある。これについては辻村氏の書かれるところを見ていただく。こゝに述べようとする言語生活の方面は、その呼び名の登場が戦後のことに属することからも知られるように、純粋に戦後のニューフェイスだと言ってよい。

二

国語学界・言語学界におけるこの機運はどうして作られたか。かねて、学問の内部に芽生えていた機運が、次第にその方向へと動いていたこともたしかである。垣内松三・西尾実・石黒修・時枝誠記・岡本千万太郎・松坂忠則・輿水実等の諸氏は、この分野

の研究に早くから関心をもっていた国語学界の先覚者たちだった。が、何と言っても、戦後の社会情勢の転換によって、学問の外側からの要求が、この脱皮をうながした大きな力だった。

いわゆる封建制の打破社会民主化革命の波によって、言論の自由は、戦後著しくハバを広げた。特に、至るところで、会議や話し合いが行われるようになり、他方、ラジオ番組への一般人の参加の道が開かれ、新聞雑誌への家庭人の投書の機会が増大した。そこへ、前に述べた国語・国字問題が世人の関心や議論を呼び起こし、さらに「日本語の混乱」ということがしきりに、いさゝか誇大に叫ばれはじめた。そんなことから、世人の興味は、話し・書き・聞き・読むことに対して、急速に向けられてきた。

一方国語学者・言語学者の側でも、だまっていることはできなかった。早く昭和二十一年には、アメリカ教育使節団の来日あり、その報告書の中の一節で国語改革の勧告を受けた。ここに、山本有三・安藤正次氏等の「国民の国語運動連盟」の結成を見、これが釘本久春氏によって代表される文部省国語課による数々の国語改革となって現れた。日本の言語学界の大黒柱であり、正統言語学の継承者である服部四郎博士のごときも、東大の東洋言語学会の例会の席で、「言語学者も、このところは、各自の専攻する狭い範囲研究を一往休んで、国字問題・国語問題を考えて然るべきだ……」という意味の発言をした。

折から小学校――大学を通じて国語教育の大きな改革が行われ、話し聞く場合の態度・技術の指導が特別に重要視されるに至った。その結果、国語学者・言語学者は教科書編集への参加が要請されるに及び、改めてこの問題をまじめに考えざるをえなくなった。のみならず、ジャーナリズムは、新聞にラジオに、学者を追いまわし、「ことばの研究室」その他特にコトバに関するNHKの番組は多くの学者を動員し、このことは学者に「話し方」そのものについての反省の機会を与えた。

国語学界の中心指導者、西尾実・時枝誠記・遠藤嘉基等の諸氏は、いずれも言語生活の研究に強い関心をもち、新しい国語研究の領域・方法を啓示した。特に、昭和二十四年国立国語研究所が創設され、研究の対象をぐっと言語生活一般にひろげてからは、この分野の研究は大手を振って国語学の一部に割り込むに至った。国語学会編の『国語学辞典』（東京堂・昭三〇）も、言語生活の面に関して相当の分量の紙面をさいている。

三

こんなふうな状勢で、言語生活言語技術の方面の研究は、戦後、すこぶる意欲的に進められて来た。しかしそれだけですぐに研究がまとまるものでない。最初に本屋の店頭に現れたのは研究書ではなく、実用書の類だった。しかも、まず学界の外の人々、例えば放送界・芸能界などのエキスパートの手に成る言語技術ものが多く出たことが注目される。これらのうちのあるものは、ベストセラーとなり、これが学界の著作に先行して、呼び水の役も果し、理論的な考察の方が後を追って出るという形をとった。

中で、代表的なものをあげれば、まず徳川夢声氏の『話術』（白揚社・昭二四）と、田代晃二氏の『言葉の使い方』（創元社・昭二七）とであろう。いずれも具体例を豊富に示し、広く親しみと興味とを与えた。雑誌「自由国民」の『現代生活のバイブル』がと

きどき特集する『挨拶・座談・会話……』といった類のものも、各界のメンバーをそろえてにぎやかきわまる。ほかに、清水正巳氏の『ビジネス談話術』（誠文堂新光社・昭二六）、山名正太郎氏の『話の進め方』（創元社・昭二八）などが、「実際家側」の系列に属する。

これらに対して、教科書風のものの代表には、R・C・リーガー『あなたも上手に話せる』の飜訳（精華学園話し方実験教室・法政大学出版局・昭二七）がある。中村通夫氏の『正しく話すために』（至文堂・昭二八）も似た傾向をもつ。中村氏は、元来国語学プロパーのエキスパートであるだけに、その説くところは、国語学ばたけの人にとって最もピッタリする。言語学者側の著書で最も具体的な叙述で生彩のあるものは、平井昌夫氏の『演説』（築摩書房・昭二八）であろう。氏には、『話しコトバの機能』（光風出版・昭三〇）の著もある。

心理学ばたけの大久保忠利氏の精力的な活動は、『コトバの心理と技術』（春秋社・昭二七）『演説と討論の手帖』（春秋社・昭二八）・『コトバの技術』（河出書房・昭三〇）等数々の力作を生んだ。同じく心理学を基礎とするもので、堀川直義氏の『面接の心理と技術』（法政大学出版局・昭二八）も、戦後の収獲の一つとして逸することができない。上野陽一氏の『人を説く法』（商風館・昭二五）もおもしろい。

話し方のうち、演説の分野は、やゝ趣を異にし、その技術については、戦前すでに、多くの文献を教えることができた。戦後は、前記平井氏のもののほかに、冠地・斎藤・中島三氏監修の『話術研究講座（総論篇）』（早稲田雄弁学会・昭和二七）が大物である。演説に代って、戦後の社会生活の花形になった会議に関しては、E・A・フォックスの『会議の知識』が富田展子氏（鎌倉書房・昭二三）によって訳出され、大久保・クロタキ・大島三氏の『演説・会議・文章』（正旗社・昭二四）も出た。文部省編集の小冊子『電話のかけ方』も小冊子ながら注目される。その他、NHKの『アナウンス読本』（昭一六。（再）ラジオサービスセンター・昭三〇）は、アナウンサーきってのコトバの権威・秋山雪雄氏の執筆になり、広くアナウンス以外の話し方にも触れている。千田是也氏の『近代俳優術』（上・下）（早川書店・昭二五）も「物言う術」一般について細かい注意を与えている。木森重樹氏の『ことばが自由に話せたら』（金子書房・昭三〇）は、吃音のなおし方で、心理学的な点に特色をもつ。

書き言葉の分野は、話し言葉の分野のはなぐ〳〵しさにけおされた形であるが、しかし、ここにも戦前とはちがった新しい傾向が見られる。文章読本・手紙の書き方の類は、戦前からガッチリしたものが出ていたが、戦後の代表的なものとしては、川端・波多野・伊藤・瀬沼・吉田五氏編集の『文章講座』（七冊・河出書房・昭二九）がある。木村毅氏の『新文章読本』（旺文社・昭二四）、山名正太郎氏の『手紙の話術』（創元社・昭二九）も新味がある。『文章講座』の一冊に、『実用文の理論方法』（昭三〇）というのがあるが、実用文・公用文の書き方の工夫を説くものによいものが出たことは、戦後の特色で、『新しい文書実務』（春秋社・昭二八）など、松坂忠則氏の活躍が目立つ。NHK編の『ラジオとニュース……書き方と編集』（NHK・昭二八）、藤倉輝夫氏の『新聞の文章』（同文館・昭二九）は、ニュースの原稿・

新聞記事の書き方を要領よくまとめている。

読む生活の面のものには、草島時介・森岡健二・佐藤正三氏共著の『どうすれば速く読めるか』（カ江書院・昭二六）という珍しい研究が出た。

四

言語技術をもふくめて、言語生活一般を論じたものとしては、西尾実氏編『言葉と生活』（毎日ライブラリー・昭三〇）、NHK編『日本人の言語生活』（講談社・「ことばの研究室」Ⅱ・昭二九）、同『言葉の魔術』（同、ミリオンブックス・昭三〇）、上甲幹一氏編『日本人の言語生活』（大月書店「講座日本語」Ⅳ・昭三〇）、刀江書院の『国語教育講座』の第一巻「言語生活篇」（昭二六）、大久保忠利氏の『コトバの魔術と思考』（春秋社・昭二八）阪本一郎氏の『ことばの心理』（金子書房・昭二七）といったところが代表だ。この分野ではアメリカ一般意味論の研究が重視されるが、その最初の紹介として、S・Iハヤカワの『思考と行動における言語』が大久保忠利氏によって訳され（岩波・現代叢書・昭二六）、広く繙読された。一方、国語学界を代表する著作としては、時枝誠記博士の『国語学原論・続篇』（岩波・昭三〇）がある。これは言語過程説の発展として、言語生活の国語学の中に占める位置や研究の方法について論究した注目すべき文献である。

ところで、言語生活、特に書く言語生活に関しての、終戦後最大の研究成果は、CIEと文部省とで行った調査の報告書『日本人の読み書き能力』（東大出版部・昭二六）だった。戦後の、まだ世情安定しないころ、なかば進駐軍の威力に物を言わせて強行した調査の結果であるが、その被調査者の総人口は、二万一千人に及ぶもので恐らくこのような大がかりな調査は、日本に二度とは行われないだろう。日本人の中に、社会人として完全な読み書き能力をもたないものが多いことは、調査する以前から予想されていたが、その具体的な割合を明確にしたところに手柄がある。多方面の学者たちの協力になるものであるが、ことばの学者としては、石黒修・柴田武・野元菊雄三氏の力が大きい。石黒氏はその結果を要約して、『日本人の言語生活』（東大出版部・昭二六）を書いた。

国立国語研究所で行った調査の報告『八丈島の言語生活』（秀英出版・昭二五）、『言語生活の実態』（秀英出版・昭二六）、『地域社会の言語生活』（秀英出版・昭二八）なども、単に一地方の方言の調査報告ではなくて、一つの地域に住む人たちの言語生活の調査の報告である。とにかくこれら一連の研究物は、調査方法の進んでいる点、在来の方言研究書の類とはケタちがいである。ここでは、プランナー岩淵悦太郎氏と、それからこゝでもまたプロデューサー柴田武氏の活躍がめざましい。ある一人の一日の言語生活を調べるために、特定の人を選んで一日中そのあとをついてまわり、どんなことをどんな相手にしゃべるかを逐一記録し整理するいわゆる「二十四時間調査」は、福島県白河市ではじめて行われ、その結果は、右の『言語生活の実態』に掲載されている。

後まわしになったが、「ことばの総合雑誌」を謳う『言語生活』（国立国語研究所、筑摩書房・昭二六創刊）の意義は大きい。次々と魅力的なテーマをかゝげては、言語生活の新しい面を

切り開いていく手際はあざやかである。同誌をはじめ、各雑誌にも、言語生活に関する多くのすぐれた述作が発表されているが、そこまで言及する余裕がなかった。話術ロータリー編集の『ことば』（昭三〇創刊）も『言語生活』と同じ傾向の雑誌で、言語技術の面に特に力をそそいでいる。

五

以上を総括すれば、終戦後の国語学は、今や言語生活・言語技術という新しい研究分野を加え、その内容を豊かにしつゝあるところである。長い歴史を持つ国語学の中で、この分野はとびきり年令が若い。それだけに、学問的な体系はいかゞ、ということになると、いかにも未熟の感をまぬがれない。橋本博士およびその追随者による国語音韻史の研究などとくらべるとおとなと子供ぐらいちがう。しかしながら、学問の外からの関心と要求の強さにおいては、この分野にまさるものはない。内にも、有能気鋭の研究家の輩出がいちじるしく、他の分野のヴェテラン・中堅研究家の転向も続出している。「言語生活学」「言語技術学」の前途は洋々たるものにちがいない。こゝ数年来の動向をかえりみつゝ、あわせて将来への希望を新たにして、展望の筆をおく。

——名古屋大学助教授——

「国語学」第二九輯　正誤

ページ	行	誤	正
5	11	誰がいかなる	誰が何時いかなる
6	6	私は今友人を訪問しようとして、「彼は居るだらう」	私は今「雨が降るだらう」
6	7	私は「雨が降るだらう」	私は友人を訪問しようとして、「彼は居るだらう」